

平成21年度 工芸科学部 学位記授与式
学長告辞

本日、ここに学士の称号を得て卒業を迎えられた皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心からお祝いを申し上げます。

また、この日に至るまで、長い間にわたって皆さんの勉学を支えてこられたご家族および関係者の方々のご労苦に対して深い敬意を表します。

皆さんは、明日から、本学で学んだ知識と経験を糧に新しい世界へ船出されることになります。

そして、企業での仕事、あるいはものづくり、また大学院での研究等、様々な仕事に従事され、社会的自己実現を果たされることになります。小学校から大学までの教育は、実は、この社会的自己実現に向けての準備であったのです。

この意味で、大学の卒業は、皆さんの人生の中でも大きな節目となる出来事であります。

皆さんを待ち受ける現在の社会は、大変厳しい状況にあります。

世界的経済不況は未だ収まらず、環境破壊、地球温暖化、宗教的対立、貧富の格差、少子高齢化、年金問題、ワーキングプアなど、課題山積の社会の中で、多くの人が漠然とした不安の中で、日々の活動を行っています。

このような社会に船出される皆さんは、今まで経験したことがないような困難に遭遇されることになると思います。

そして、このような厳しい時代を生き抜く力が試されることになります。

困難な課題に遭遇したときどのように身を処すか、激しく変化する社会の中でどのように生きてゆくかは重大な問題です。

特に、今日を境に社会に旅立たれる皆さんにとっては重大です。

そこで、今日は、このことに関し、一言申し上げたいと思います。

困難な課題を克服しようとするとき、人と人のつながりが極めて大きな力になるということについてです。

逆説的に申しますと、人と人のつながりが欠如した社会的孤立は、それ自体が生命体を厳しい状況に置くことになります。

そこで、今日は、人と人のつながりの重要性について、逆説的な視点からお話しをします。

人間は、家族、友人、地域、職場に属することによって社会のネットワーク、人と人とのネットワークの中で生きています。社会的存在としての人間の理解は、近年、飛躍的に深まりました。その成果の一つとして、社会的孤立が人々に重大な影響を及ぼすことが明らかにされました。

心理学者のBaumeister と Leary による一九九五年の研究では、社会的存在としての人間の本質が、次のように示されています。

人間は、他人と社会的関係を築き、それを安定したものとして維持しようとする動機付けをもっている。この社会的所属欲求 (the need to belong) は人間にとって、根本的な動機付けである。

すなわち、人は、二、三人の他人との頻繁で情緒的に心地よい絆に対する強い動機付けをもっており、この欲求は、時間的に安定し、互いの幸福を情緒的に気遣いあう枠組みを持続するようなかかわりによって満たされる。この意味で、人間の心は本質的に社会的な存在としての性質をもっている。

Baumeister と Leary のこのような考えは、最近の脳科学においては social brain という考え方に基づく研究としても展開されております。

人の脳は、社会的存在としての人間、つまり、根本的な動因である他者との相互作用を満足すべくデザインされているのです。

もし、社会的排除や社会的孤立が起これば、人間の心、即ち、脳はデザインされたようには機能することができないのです。

具体例を紹介しましょう。

二〇〇三年に、心理学者の Eisenberger らは、人を対象として、社会的排除事態に遭遇すると、物理的痛みに係わる脳の領域が反応することを明らかにしました。

社会的排除によって心が傷つけられると言われますが、これは決して比喻ではないのです。

脳では心の外傷は肉体の外傷と同じ脳機構、領域で扱われているということができののです。

大きな過度の外傷を受けると、脳内では、麻薬物質である「オピオイド」が放出され、痛みにも損なわれることなく脳機能が継続できるメカニズムが備わっています。

このメカニズムは、傷ついた動物が生命を脅かすような危機的な状況から逃げる行動を可能とし、生存を可能にする機能を持ちます。もし、オピオイドが放出されず、痛みのために逃げる行動が出来ないと、生存が不可能になるのです。

腕を接触によって無くすという重大な事故に遭遇したトラック運転手が、腕を無くしたにも関わらず暴走などに至らず、冷静に対処し、大事故を防止できたという話がありますが、腕を無くした運転手の脳内には、オピオイドが放出され、痛みが感じられなかったため、冷静な対応が可能だったのです。

Eisenberger らの研究結果は、社会的に与えられる外傷である排除や孤立によって、「痛み」を緩和する機能が働くことを示しています。社会的排除に起因する大きな痛みによって、脳内にオピオイドが放出されれば、痛みは緩和されますが、その結果は痛覚の消失 (analgesia) に至ります。

ところで、痛覚は、情緒と深く関連しています。

このため、痛覚に対する無感覚は、情緒に関する無感覚と結びつくことになります。

社会的排除の程度が大きくなると、痛覚の消失が起こり、情緒反応は消えていくのです。

その結果、何も感じなくなり、そして他者に対する共感や同情を感じなくなるのです。

また、社会的な排除は、知的思考を著しく損なうことがあります。

特に、論理的思考や推定といった知的作業に支障をきたします。

社会的に孤立すると、人々は他者との係わりに必要な努力や他者のために自分を犠牲にするといった自己のコントロールの意欲をも失ってしまうのです。

人間は他者との深くかつ持続的な交流によって脳の機能が保たれる存在なのです。

かつて、経済成長期には、日本では、いわゆる「日本型共同体」が築かれ、社会保障と雇用制度が「まじめに働けば普通の暮らしができる」ことを保証し、人々を貧困や社会的孤立から守っていました。旧来の日本型共同体システムは、実は、社会的孤立、排除を起こさないシステムであったということが出来ます。

しかし、今日では、経済のグローバル化による国際的な競争の激化が進み、「日本型共同体」システムの多くは、自由競争の社会システムに置き換えられました。その結果、社会的排除や社会的孤立が起こりやすい社会になってしまいました。

最近、自ら死を選ぶ事態が多くなっていますが、この多くは、社会的排除や社会的孤立に起因すると考えられています。このような状況のなかで、人間が如何に社会的な存在なのかを認識し、人のつながりを保ち、社会的孤立を防ぐ社会システムを再構築することが

求められています。

皆さんが、今日、卒業式を無事に迎えることが出来たのは、人と人とのつながりがあったからだと思います。

皆さんが、社会的排除や孤立とは、無縁の環境で過ごすことができたからだと思います。

この意味で、本日は、皆さんが、人と人とのつながりの意義と重要性をいま一度考えていただく日であります。

専門について深く学び、友人、先輩、後輩との思い出深い時を過ごし、そして、多くの先生から指導を受けたことなど、人と人とのつながりの中で過ごされた本学での学生生活をじっくり振り返り、吟味していただく日であります。

また、ご家族をはじめ多くの人々のご支援によって今日を迎えることが出来たことと思います。従って、今日は、皆さんを気遣ってくれる人々との絆を振り返り、感謝する日でもあるのです。

本日は、本学の元学長である巽友正先生をはじめ、本学の名誉教授、本学同窓会の幹部の方々に多数ご臨席いただいておりますが、皆さんを気遣い、皆さんの門出を祝すためにご多用の中を駆けつけていただいたのであります。誠に有り難いことであります。

人々との絆は、今までがそうであったように、今後も、皆さんが困難に直面した時に、大きな力を与えてくれると思います。

皆さん一人一人が、今まで培ってきた能力のさらなる向上と創造性の涵養に努められ、そして良き仲間をめぐり合い、社会の一員として他者とのつながりを深くし、それらを糧に、新しい希望に満ちた社会の実現のために貢献されることを願って、私のお祝いの言葉と致します。

本日は、学士の取得、まことにおめでとうございます。

平成二十二年三月二十五日
京都工芸繊維大学長
江島 義道